松江工業高等専門学校 同窓会 会報

第2号
2012.8.1発行

同窓会事務局
〒690-8518 島根県松江市西生馬町14-4 松江工業高等専門学校内
TEL.0852-36-5111 FAX.0852-36-5119 E-mail: m-soumu@matsue-ct.jp
http://www2010.matsue-ct.ac.jp/dosokai/

ご挨拶

松江工業高等専門学校同窓会 会長（10期（土木）） 多久和正司

会員の皆様におかれましては、何かと不安定で先が見えない社会・経済情勢が続く中、各界各分野で御活躍のことと存じます。

昨年復刊した会報第2号をお届けできる運びとなりました。

昭和44年に第1期生が卒業されて以来40年余りが過ぎ、第一線を引かれ新たなチャレンジをしていらっしゃる会員も増えてきています。すべてにおいて十分ではなかった開校当時の環境の中で学び、社会の中で高専卒業生の評価を確たるものにしていただいた諸先輩方に対し、改めて敬意と感謝の念を強くする最近です。

一方で、毎年のように数名の教員が定年を迎えられ、退職記念のお礼を申し上げるたびに、一抹の寂しさも感じています。卒業年次の新しい会員の皆様は、母校にまだ恩師がいらっしゃるので、実社会で苦労していることなどについてアドバイスをいただくなど、母校との繋がりを感じる機会もあると思いますが、初期の卒業に近いほど、母校を訪れたりする機会が少なくなっているのではないでしょうか。

間もなく開校50周年を迎えます。同窓会といたしましても節目のイベントに協力していきたいと考えていますが、会員の皆様が母校に久々に集い、50年の歳月を感じていただける機会になればと考えています。

本同窓会が皆様にとってよりよいものになりますよう、今後ともご理解とご支援をお願いします。

皆さんこんにちは

松江工業高等専門学校 校長 井上 明

本年4月から松江高専の校長になりました。同窓会会員の皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

松江高専は、再来年（平成26年）で50周年という節目の年を迎えます。この間、皆様方多数に上る卒業生が各方面で活躍し充実した人生を送られているとともに、本校は産業界を始め社会から高い評価をいただいております。

中学校卒業後に入学し、その後5年間の青年期の多感で人間的に成長を遂げていく時期に、同じ学校の中で同級生、上級生に囲まれ、教職員との密な関係の下、実践的な教育を受ける学生生活……高専は非常に特色ある教育機関ですが、皆さんは全てそれを体験ずみです。思いを同じにする仲間、先生と過ごした日々を共有した皆さんの同窓意識も、格別なものがあることと思います。

さて、現在の皆様方の母校松江高専の学生たちは、全体的にみれば、概してまじめな態度で学生生活を送っております。また、教職員の間では、学生たちが向上心を持って取り組むように皆で熱心に指導しようという雰囲気のある学校だと思っております。

近年、松江高専では、低学年からの基礎的学力の向上に意を注いでおり、高学年になるにしたがって創造的な力をつけることを目指しております。また、引き続きロボコン等の各種コンテストでの上位成績を目指すとともに、クラブ活動への取り組みについては高専大会等での上位入賞の成果もみております。さらに、学校として、地域からの期待に応えて連携・支援の役割を果たすことや、子どもたちへの科学への興味・関心を育むことにも取り組んでいます。教員による各種資金獲得による研究や教育改善意欲にも高いものがあります。

今年は、直野寮の1号館を建て替える工事も始まりました。

引き続き、松江高専のことを気にかけていただき、ご支援たまわりますよう、よろしくお願いいたします。

松江高専における入学者確保の取り組みについて

入学WG主査 渡部 徹

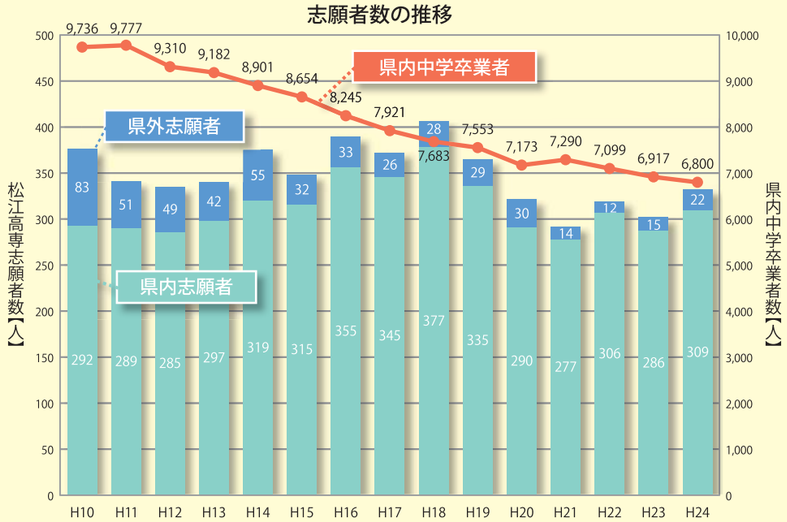
全国に先駆けて少子高齢化が進行している島根県に所在する松江高専の入学者確保の取り組みについてご紹介します。

平成10年から平成24年までの島根県内の中学卒業者数の推移（図1）をみてみると、平成10年では9,736人だった中学卒業者が、平成24年には約3割減の6,800人まで減少しています。松江高専の定員は全5学科で200名を維持しており、必然的に低学力の中学生が本校に入学してくることになります。また、少子化が著しい島根県では、県内中学生の約3％（30人に1人）が本校に入学していることになりますが、これは全国平均の0.8％に比べてかなり高い数字といえます。

このような少子化の影響に加え、近年の理工系離れによる志願者数減少の対策として、本校では様々な取り組みを行なっています。①オープンキャンパス（8月に2回実施）、②学校開放事業（小中学生向けの講座）、③出前授業（小中学校や公民館等に高専教員を派遣し授業を実施する）、④テレビや新聞での広告、⑤Webページやメールマガジンによる広報活動、⑥中高連絡会（中学校教員を本校に招き情報交換を行う）、⑦中学校主催進路説明会などへの積極的な参加などを行なっています。

中学生に本校の特長をPRする際には、高専の教育内容の他、各種コンテスト（ロボコン、プロコン、デザコン等）、部活動、寮生活、進路状況（近年、高専卒業生の約4割が大学や専攻科に進学しています）などを中心に説明しています。今後も中学生やその親族に高専の魅力をアピールしていくと共に、本校の教育・研究の充実を図っていきたいと考えています。同窓会の皆様のご理解とご協力をお願い致します。

志願者数の推移



三瓶縦走登山

昨年9月10日（土）に機械工学科1年生（現2年生）が三瓶山登山を行いました。この登山は、9日（金）から国立三瓶青少年交流の家で実施した合宿研修（2泊3日）のプログラムとして行われ、部活動等の理由による欠席者を除く36名の学生と同学科の教員が、男三瓶（標高1,126m）と女三瓶（同957m）を縦走しました。また登山の後には、全員が野外炊飯でバーベキューを楽しみました。参加した学生は、登山や野外炊飯などを通してお互いの交流を深めるとともにクラスの団結力を育むことができ、とても有意義な合宿となりました。（A）

事務局より 昨年、本会会報を「創刊号」として発行いたしましたが、その後、会報が以前発行されたことがあると複数の会員の皆様よりご指摘いただき、今号を「復刊第2号」といたしました。「創刊号」の発行に携わった先輩方に心よりお詫びいたします。2年後に学校創立50周年を迎えますが、復刊した会報が学校とともに50年、そして100年続きますように、事務局一同微力ながら尽力いたします。会員の皆様の忌憚ないご意見をお待ちいたしております。（M）

平成23年度

定年退職教員 紹介

昨年度をもって、坪倉公治教授、藤原豊教授、藤井諭教授の3名の先生方が松江高専を定年退職されました。その3名の先生方にお言葉を寄せていただきました。

同窓会の皆様へ

機械工学科　坪倉 公治

昭和47年から平成24年まで40年間にわたり勤務し、この3月に無事退職することができました。これも私が出会った全ての皆様のお陰であり感謝申し上げます。振り返ってみますと、いろいろな思い出がありますが、やはり担任をしたことが思い出されます。どのクラスも思い出深いですが、強いてあげるとすると初めて担任したクラスが、私にとっては、とても印象深いクラスです。このクラスが5月に退職記念同窓会を開催してくれました。このときに私は保管していた当時のクラス写真をまとめたアルバムを作って皆に配りました。このアルバムの表紙に「君たちがいてわたしがいる　私がいて君たちがいる・・・感謝」と書きました。この言葉にあるように、私にとって高専に勤務した日々は、まさに学生との共育の日々だったように思います。

いずれにしても40年間有意義な日々を送らせていただきました。ありがとうございました。

最後になりましたが、同窓会の皆様そして松江高専がますます発展されるよう祈念しています。

最初に担任したクラス写真（約30年前）

松江高専39年間の教員生活

電子制御工学科　藤原　豊

平成24年3月31日をもって、無事に定年退職を迎えることができました。昭和48年4月1日に本校教員として採用になり、以来39年間差なく仕事を全うできましたのは、関係各位ならびに卒業生・在校生のご支援・ご鞭撻のお蔭であり、紙面をお借りして、改めて御礼申し上げます。

赴任以来、管理工学、品質管理、システム工学、経営工学、生産システム工学、統計解析法、図学、製図基礎、機構学、工業力学、計算機工学、プログラミングなどの授業を担当してきました。39年間の“閻魔帳”は今でも大事に宝物として保存しています。「欠点でなく、合格点をつけてやればよかったのに」とか、「もう少し工夫すれば、学生にわかりやすく教えることができたのに」とか、見返すたびに反省の日々を送っている今日この頃です。

校務として、学生部、寮務部、教務部、各学年の担任（生産機械工学科および電子制御工学科）、学科長、副校長などを歴任してきました。担任として進級認定会議での緊張感や学科長として5年生の就職内定や大学編入試験結果に一喜一憂したことが懐かしく思い出されます。

また、クラブ顧問としては、硬式野球部の初代監督を努めさせていただきました。それまでの野球同好会から硬式野球部に昇格になり、高専大会に参加することができました。監督として、試合前にシートノックすることが必要ですが、なかなかキャッチャーフライが打てず、かなり苦労しました。

その後、硬式庭球部の監督を長年つとめましたが、昭和60年度には全国大会の個人戦ダブルスで村上静夫君（当時土木5年）と池田謙一君（当時電気5年）のペアが優勝を勝ち得たことは今でも鮮明に記憶に残っています。同時に両君はその年度の島根県スポーツ功労賞に輝きましたことを誇りに思います。

思いつくままに、私の“海馬”に保存されていることを文章にさせていただきました。思い出はつきませんが、松江高専での教員生活は、楽しい思い出でいっぱいであり、“松江高専は藤原　豊にとって天国のようであった。”ことが今更のように思いだされます。皆様のこれから活躍とご多幸を祈り、筆を置かせていただきます。ありがとうございました。

硬式野球部監督時代

昭和60年度島根県スポーツ功労賞受賞
昭和60年度全国高専テニス大会ダブルス優勝（於旭川高専）

藤原、村上静夫（C5）＆池田謙一、鍔木哲男

松江高専を振り返って

情報工学科　藤井　諭

松江高専は昭和39年に設立され、私はその第一期生として入学しました。まだ体育館はなかったため、雨の後はグランドが泥んこになり屋上で体育をしたことを覚えています。バレーボールが下に落ちると困りました。今思えば懐かしい思い出の一つです。

卒業後はパナソニックに入社し、25年間勤務し主にコンピュータシステムの研究開発を行ないました。そして平成6年に転職して松江高専の教員となり、情報工学科の立ち上げに力を注ぎました。一期生、二期生とは昔の自分に似た不十分な教育環境の中で共に苦労した感があります。情報一期生が今年の正月に同窓会で退職祝いをしてくれたことは、良い思い出として残ると思います。私にとって教え子は後輩でもあり、勉強、プロコン、部活などで学校生活を共にする楽しさがありました。

私は高専時代から登山を続けています。当時の松江高専には山岳部があり、大山などに登りました。東京に住んでからは社会人山岳会に入り、日本アルプスを始めとして海外の山にも多く登ってきました。松江に帰ってからは地元の登山クラブに入り登山を続けています。今年の目標は山仲間と共にアフリカの最高峰、キリマンジャロ（5,895m）の登頂です。

最近、Facebookに多数の教え子が入っていることを知りました。快く仲間に加えてもらうと、教師の役得だなと思います。其々の道で活躍してくれていることを知るとうれしくなります。これからも松江高専が、社会で活躍する卒業生を排出されることを期待します。

Windows、Google、Facebookなど世界をリードするソフトウェアは、全てアメリカの大学生が考案し起業してできたものです。日本の大学からは、なかなか世界をリードするソフトウェアが出てきません。これからは新しい発想で物作りが得意な高専生から、世界をリードするシステムやソフトウェアが生まれることを期待しています。

会員の声

在学中の部活動の思い出を4名の会員の皆様より文章を寄せていただきました。

■思いの詰まったメダル

14期（土木）　木佐 元則

卒業して30年が過ぎましたが、私の高専バスケット部のスタートは入学式前に春の合宿にオープン参加させてもらったことでした。20名近い部員の中には大人の風格が漂う先輩方が半数近くおられ、中学校を卒業したばかりのものには社会人と一緒に練習するような感じでした。

そんなことから始まった部活動でしたが、当時から全国大会に出場することは当たり前でメダルを獲得することが目標でした。メダルは確実と思われていた先輩方が夢を果たせず次々と卒業され、その悔しい思いを受け継ぎながら、私が５年生の時に悲願であったメダルを手にすることができました。これも、それまでの先生や先輩方のご支援、そして後輩たちの協力があったからこそ達成できたと思っています。

（同窓会副会長）

■硬式野球部での思い出

25期（土木）　加納 正浩

私が入学した昭和63年当時は、5年生から1年生まで同じチームでプレーしており、先輩のパワーやスピードに圧倒されたこと、また熱心にご指導頂いたことが印象に残っています。

３年の春には、野球部の先輩や先生方にご尽力いただき、高校野球連盟に加盟させて頂きました。夏の大会は初戦敗退でしたが、甲子園を目指して野球ができた貴重な４ヶ月間でした。

４年の秋には高校野球チームの監督を拝命し、野球漬けの毎日でしたが、選手達には教えるよりも指導方法等多くの事を逆に教わった1年間でした。

また、夏の大会では念願の初勝利を収め、選手達の熱いプレーに大きな感動をもらったことは強く心に残っています。

高専を卒業して20年経った今でも、多くの先輩や後輩と付き合わせて頂いており、私の大切な財産となっています。

最後に野球部の益々のご健闘を祈念いたします。

■仲間との思い出

36期（機械）　江角 真美

５年間続けてきた吹奏楽部での思い出といえば、やはり夏のコンクールと１年間の活動の集大成となる定期演奏会です。

コンクールは毎年８月末にある中国大会まで出場させて頂いたのですが、夏休みに入るとほぼ毎日１日練習となり、暑い中教室でパート練習をやったり、講義室で合奏をしたり、少しでもいい演奏ができるように練習に打ち込みました。定期演奏会では曲を演奏するだけでなく、劇や合唱をしました。特に劇は部員が内容を考え、みんなで練習後に小道具作りもしました。今でも同級生や先輩、後輩に会うと当時のいろいろな思い出話が尽きません。今思えば、同じ目標を持つ仲間がいたからこそ夏のつらい練習を乗り切ることができたと思います。吹奏楽部に入ったことでたくさんの仲間と出会えたことが一番の大切な思い出です。

■サッカー指導者・教育者としての原点

37期（土木）　安食 正太

私は高専に本科５年・専攻科２年と７年間在学しました。その在学中、私はサッカー部に所属し、日々サッカーに一生懸命励みました。当時、サッカー部には指導者がいなく、チームのスタイルや方向性を決めること、すべて選手によって行わなければなりませんでした。私も上学年になるとキャプテンを務め、そしてコーチとしても携わらせて頂き、時にはチームのまとまりに大変悩むこともありましたが、“サッカーを楽しむ”をモットーとして活動していくうちにチームが大きく成長したことを思い出します。こうした成長から、全国高専大会へ後輩たちが出場してくれたことが一番の思い出、そして心から嬉しく思う出来事でした。

この高専での経験が、今も続ける私のサッカー指導者のスタートであり、そして、教育者としての原点となる大切な思い出です。

（松江高専・技術職員）